

川村学園女子大学研究紀要 第28巻 第3号 1頁－12頁 2017年

アートイベントと観光まちづくり ——瀬戸内国際芸術祭と地域社会——

高山 啓子*

Town Development through Art Festival and Event Tourism

Keiko TAKAYAMA

要 旨

本稿は、観光まちづくりに活用されている祭りやイベントの中でも、芸術祭と呼ばれるアートイベントに着目し、アートイベントがどのように観光まちづくりと関わりを持ちうるかを明らかにしている。まず第一に、近年の観光まちづくりの特徴、祭りやイベントがどのように観光資源化されるか、第二に、アートイベントに期待される地域活性化という効果、現代美術と観光行動の親和性を明らかにした上で、瀬戸内国際芸術祭を例にあげ、実際にアートを通してどのような観光まちづくりがなされているかを示している。瀬戸内国際芸術祭においては、観光イベントとしてのさまざまな情報発信が行われ、また地域住民がイベントに直接携わることによって、アートの島々といった新しい地域らしさの創出が徐々になされ、アートイベントと観光を通して新しいまちづくりが行われていることを明らかにしている。

キーワード：観光まちづくりと社会参加、イベント観光、テーマ化、芸術祭と地域社会、伝統や文化

1. はじめに

祭りやイベントは、さまざまな意味で地域活性化の手段として活用されてきた。近年は全国各地で、祭りやイベントを「観光資源」としたまちづくり＝観光まちづくりが盛んに行われている。本稿では、観光まちづくりに活用されている祭りやイベントの中でも、特に芸術祭と呼ばれるアートイベントに着目する。

*教授 社会学

観光とは楽しみのための旅と定義され、日常生活の場を一時的に離れて行われるという特徴を持っている。つまり観光とは非日常の体験であり、またその場所にしかないものを求めて移動する行為である。こうした観光行為の特徴は、イベントの開催、現代美術の特徴と親和性を持っていると考えられる。それでは、芸術祭、アートイベントはどのように観光資源となり得ているのか、またそれによる観光を通したまちづくりはどのように行われているのか。近年、注目されている芸術祭のなかでも、瀬戸内海の島で開催されている「瀬戸内国際芸術祭」を例にあげ、芸術祭、アートと観光と地域活性化の関わりについて明らかにする。

以下では、まず第一に、祭りやイベントと観光まちづくりの関係を概観し、第二に、日本における文化芸術イベントまた現代美術と観光との関係を明らかにする。最後に、アートイベントによる観光まちづくりの事例として瀬戸内国際芸術祭による観光まちづくりのあり方を検討する。

2. 祭り、イベントと観光まちづくり

(1) 観光まちづくりとは

近年、「観光まちづくり」という言葉が自治体等で用いられるようになっている。この言葉は観光による地域振興ということにとどまらない意味を含んで用いられている。まず「まちづくり」は行政で用いられるようになった言葉であり、国土交通省のサイトには特に説明もなく「まちづくり」のページが設定されている。まちづくりの「まち」という表記には町、街、集落、地域といった幅広い意味が含まれており、まちづくりとは従来の都市計画にとどまらず、地域振興、地域活性化までを目指すものであり、環境、景観、歴史、産業、観光、防災、福祉の整備などを通して行われる。こうしたまちづくりが改めて行われる背景には、地域の産業の変化、衰退、それにともなう人口減少、過疎化といった問題がある。

なかでも観光まちづくりとは、観光を通してのまちづくりということになるが、具体的にはその地域らしさとつながる、さまざまな「観光資源」の整備によって行われるということと、外部の観光事業者によるものではなく、地域住民、自治体が主体となって行うという特徴を持っている。その地域らしさとつながる観光資源といっても単一のものではなく、歴史的建造物、史跡、文化財、自然景観、町並み、観光施設、テーマパーク、美術館、祭り、花火大会、イベント、グルメ、特産品、キャラクターなど、さまざまな観光資源が複合的に活用される。

(2) 祭り、イベントの観光資源化

さまざまな観光資源のなかでも祭りやイベントといった、短期的、一過性のものにはどういった特徴があるのだろうか。元来の祭りは、地域共同体における信仰行事であり、共同体のメンバーにとっては、そうした意味しかもたないはずである。これを例えば、共同でまつという行為をすることで共同体の連帯が強化されるというのは、外的な視点によって見出される祭りの意味である。祭りは、それを実施する地域共同体にとっては自分たちが信仰する神などのために行われるものである。

しかし、社会の近代化によって社会の地理的な範囲は拡大し、人の移動が増加したことで、次第に祭りが観光対象化、イベント化していったものと思われる。祭事のなかで行われていた踊り、芝居等の伝統芸能の上演も奉納といった信仰的な意味を持つものから、観客、観光客に見せるためのアトラクションへと変化してきた。

広義のパフォーマンスは、パフォーマーがオーディエンスに対して何らかの印象を与えるものであり、観光客に対して見せ、それによって何らかの印象を与えていくという意味で、あらゆる観光対象の提示はパフォーマンスといえることができる。なかでも観光対象としての祭りやイベントは、観光客に対するパフォーマンスという性格がわかりやすい。常設されているものとは異なり、短期間に集中して集客が望める可能性があり、またイベントごとに内容や演出の変更が可能であり、常に新しい内容を提供することができるといった利点がある。

実際に通常より大幅な観光客増加を期待されるイベントとして、大型国際イベントであるオリンピックなどの国際スポーツイベントや、万国博覧会などが開催されている。こうしたイベントを観光対象とするイベント観光は、観光オフシーズンの集客、観光需要拡大、また地域のイメージ作りが期待され、現在では観光振興の手段として定着していると言える。また伝統的な地域共同体の祭りも観光客の利便性、娯楽面の強化によってイベント化されてきた(Holt, 2010)。特にこうしたイベントや祭りは観光資源の少ない地域で新しい観光資源として期待されるという特徴がある。

こうしたイベント観光は、近年増加している特定のテーマに沿った対象を見たり、体験したりするテーマ観光の一つである(高山, 2014)。アートイベントはそうしたイベントの中でも、特に明確なアートというテーマを持っていると言える。さらに観光まちづくりにおいても、近年特定のテーマに沿ったまちづくりが行われている。アートイベントを通した観光まちづくりは、アートというテーマによるまちづくりであり、テーマ観光を求める観光客の期待に応えたものになっているのである。

3. アート（芸術）と観光の関わり

(1) 文化芸術イベントと地域活性化

日本国内においては、1980年代後半より文化芸術活動やイベントを地域活性化に結びつけるプロジェクトが各地で実施されてきた。文化芸術イベントと一口に言っても、芸術祭、音楽祭、映画祭、演劇祭といったアートの各ジャンルや、地場産業と結びついた「陶器市」なども広義のアートイベントに含めてとらえられることもある。

こうした文化芸術イベントによる地域活性化には二つの意味が含まれている。第一に、文化芸術イベントを開催することによって外部からの観光客を集めるという、イベント開催による観光振興という意味である。文化芸術イベントを開催することによって、来場者＝観光客の宿泊、飲食、地域内での交通機関の利用などによる利益と、イベント開催における地域の雇用創出が見込まれ、地域経済の活性化につながるというものである。またイベント開催による地域の知名度の向上、イメージ形成、ブランド化がさらなる観光振興につながると考えられるのである。

第二の意味は、地域住民が観光関連事業の部分に関わるだけでなく、イベント自体に参加することによって地域が活性化されるというものである。イベント自体への参加とは、イベントの運営、ガイドのみならず、アートイベントであれば作品の制作自体に携わるということも含まれている。

地域活性化を求めて行われるアートイベントの開催地は、都市部、観光地、過疎地域と多様である。札幌国際芸術祭、横浜トリエンナーレ、あいちトリエンナーレなどは都市部におけるアートイベントであり、北海道の夕張で開催される夕張国際映画祭や新潟県越後妻有の大地の芸術祭などは過疎化地域におけるイベントといえる。特に過疎化地域における文化芸術イベントでは、富山県利賀村で1982年より開催されてきた「世界演劇祭・利賀フェスティバル」が地域おこしの成功例として知名度が高い（大成、2003）。

(2) 現代美術と観光

芸術祭と言われるアートイベントは、音楽祭、演劇祭、映画祭等さまざまなジャンルがある。前述したように、アート（芸術）と観光との関わり方は非常に多様であるが、ここでは特に現代美術と観光との親和性について見ていく。

美術と言われる芸術の特徴は、その視覚性にある。もちろん、イベントが開催されることの多いジャンルである映画や演劇は視覚的要素が多くを担っており、音楽も演奏がなされる現場

で聴く場合は、演奏者を見ることを含めて行われる活動であり、その意味で視覚的要素の経験を含んでいる。

観光客による写真撮影は、観光行動の一つとしてよく行われる活動である。観光客は観光の記念に風景や建造物、あるいはその前にいる自分たち自身を撮影する。現代美術の中でも特に屋外に展示されているオブジェやインスタレーションと呼ばれる空間を体験させるような作品は、美術館の建物の中に展示されている絵画などの美術品とは異なり、写真撮影が可能な場合が多い。またそうしたオブジェを撮影する際には周囲の風景を同時に撮影することになり、「風景の中のオブジェ」といった写真が撮られることになり、写真撮影という観光行動に非常に親和性があると思われる。さらに、観光行動の一つの性質である「非日常の経験」ということに關しては、日常的な風景の中に現代美術／オブジェが置かれることによる違和感、つまり非日常感がわかりやすく示されることになり、非日常体験を視覚的に提示することができる。

近年、SNS等インターネット上で誰もが情報をたやすく発信できる環境が用意され、カメラ機能を備えたスマートフォンが普及していることにより、観光行動として撮影した画像を発信することが容易になっている。つまり、非日常的なものとしてアート作品を体験し、それを撮影して発信するところまでが、一連の観光行動となっているのである。こうしたことから、より明確な特徴を持ち、印象的な「SNS 映え」するアート作品が、観光行動に対して親和性が高い可能性を持つと言えるだろう。

美術作品は、音楽、映画、演劇等がある程度の時間的幅を持って完成作品となっているのに対し、時間的な幅のない瞬間のみで完成された作品となっていることも観光行動との親和性を持つものとなっている。もちろんすべての美術作品がそうした特徴を持つわけではなく、時間的な幅や変化が想定されているものもある。しかし特にオブジェやインスタレーションは、絵画などと異なり、別の場所に動かすことが想定されておらず、「その場所」に行かなければ見られない、体験できない作品であるという特徴も持っており、観光行動に結びつきやすいということも言える。

世界的に見ると美術館は、ルーブル美術館をはじめとして観光ツアーのコースなどにも組み込まれているものや観光客の来館も多く、観光資源として確立されていると言える。また近年、日本国内では現代美術を扱う地方の美術館が観光資源や新しい地域文化の担い手として注目されている（暮沢，2007）。石川県の金沢 21 世紀美術館、青森県立美術館、青森県の十和田市現代美術館などがそれである。さらに、瀬戸内国際芸術祭などのアートイベントは、美術、建築のみならず、音楽、演劇等のパフォーミングアートを含んでおり、それがイベント開催時ならではの特徴を出している。

現代美術を中心とした芸術祭の先進事例としては、新潟県の越後妻有地域で開催されている「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」がある。この芸術祭はアートディレクターの北川フラムを総合ディレクターとし⁽¹⁾、2000年より3年ごとに開催されている。以下では、この北川フラムがディレクターとなっているもう一つの芸術祭、瀬戸内国際芸術祭と観光まちづくりについて見ていく。

4. 瀬戸内国際芸術祭と観光まちづくり

(1) 瀬戸内国際芸術祭の概要

瀬戸内国際芸術祭は、現代美術を中心とした芸術祭であり、2010年より3年ごとに開催されている。会場は瀬戸内海の島を中心とした広域（香川県、岡山県）であり、開催年には春、夏、秋の3期にわたって開催される。これまでの来場者数は第1回の2010年が合計105日間開催で93.8万人、第2回の2013年が108日間開催で107万人である。

2016年は開催年にあたり、会期は春、夏、秋の計108日間である。アート作品数は約200点、アーティストは33の国と地域から約230組が参加している。開催地は瀬戸内海12の島（東の島と呼ばれている直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島／西の島と呼ばれている沙弥島、本島、高見島、栗島、伊吹島）と香川県の高松港、岡山県の宇野港周辺であり、各会場のさまざまな場所で作品の屋内展示、屋外展示、イベントが実施される。作品は常設されているものと、芸術祭期間中の展示、実施のものがある。会場となっている島へのアクセスは岡山と香川のいくつかの港からフェリーまたは高速船が運行されており、会期中は増便される。会場内の移動は徒歩、バス、レンタサイクル、レンタカーなどが利用され、会期中は島内のバスが増便される。

主催は瀬戸内国際芸術祭実行委員会であり、実行委員会の会長は香川県知事がつとめている。総合プロデューサーは福武總一郎（公益財団法人福武財団理事長）であり、総合ディレクターは前述したアートディレクターの北川フラムである。また総務省、経済産業省、国土交通省、国土交通省観光庁、公益社団法人日本観光振興協会の後援を受けて開催されている。

また、一般から募集されたボランティアのサポーター「こえび隊」が作品制作の手伝い、芸術祭のPR活動、芸術祭期間中の運営、各島での催しの手伝いなどに参加している⁽²⁾。

(2) 瀬戸内国際芸術祭開催の背景

観光振興が行われる背景として、他の地域と同様にこの地域もまた、人口減少、産業の衰退、

経済的落ち込みによる過疎化といった問題はあった。ただし、芸術祭会場の各島の状況は一樣ではなく、島ごとに異なる産業や歴史的背景を抱えている。漁業、農業だけでなく金属精錬等の産業を持つ直島や犬島、ハンセン病療養施設のある大島、リゾート産業を含めた複合的な産業を持つ小豆島など多様である。また、豊島は産業廃棄物の不法投棄事件でも知られている。多様な背景を持つ各島ではあるが、共通して言えるのは、島の経済を支える産業の減少、衰退や若い世代の他地域への流出といった問題があることである。

さらにこの地域でこうした芸術祭が開催されるようになった背景には、この地域の観光開発の歴史も関係していると思われる。まず、この地域は広域的には1934年より「瀬戸内海国立公園」と指定され、自然環境の保護と同時に、レジャー、観光の地として活用がなされてきた。中でも、瀬戸内国際芸術祭の象徴的存在ともいえる直島は、現在のような「アートの島」と認知されるようになるより以前に、観光リゾートとしてキャンプ場開発が行われてきたという経緯がある。その後、1987年に福武書店が直島の土地を購入し、「直島文化村構想」が立ち上げられた。1992年にはホテルとミュージアムを兼ね備えた「ベネッセハウス」が開設され、1998年には直島の既存の建物をアート作品にするという「家プロジェクト」が始められた。また、2004年には安藤忠雄設計の地中美術館がベネッセアートサイトエリアにオープンし、現在のような「アートの島、直島」のイメージが徐々に形成されていったと言える（株式会社野村総合研究所、2015、pp. 51-53）。

現在では香川県および高松市が自治体として、アートを用いた観光振興策「香川せとうちアート観光圏」（香川県）や「アート・シティ高松推進事業」（高松市観光計画）を積極的に打ち出している。また直島以外の会場各島も歴史的背景はそれぞれ異なっているものの、各島がアートを活用した観光まちづくりを行っていると言える。

この瀬戸内国際芸術祭は、地域活性化や観光振興をもたらすものとして期待されてはいるものの、前節で述べた大地の芸術祭のような中山間地域におけるアートイベントとは若干異なっている点がある。それはこの瀬戸内国際芸術祭会場となっている地域が、そもそも芸術祭以外の観光資源を複数持っているということである。この地域は、広域的には瀬戸内海国立公園に指定されており、瀬戸内海の多島といった特徴的な景観を持っている。なかでも小豆島には観光リゾート施設、映画二十四の瞳の舞台となったことから作られた映画村、寒霞溪といった自然景観、オリーブ、そうめん、醤油などの特産品というように、比較的多くの観光資源を備えている。また直島は単独でもアートの島というイメージを確立しており、芸術祭開催中の作品展示だけでなく、通常も観光資源としての美術館（地中美術館、李禹煥美術館、ベネッセミュージアム）や屋外アート作品、家プロジェクトなど多数を有している。さらに、各会場は島では

あるが、岡山や高松といった都市からフェリーや高速船等を利用して 30 分程度で渡ることができ、比較的アクセスしやすいということも重要な特徴であろう。

(3) 観光客への情報発信

芸術祭が単に地域内で、地域住民自身のための祭り、イベントとして開催されているのではなく、観光客誘致を目的としていることは、芸術祭を観光客向けに情報発信していることから明らかである。主な観光客向けの情報発信手段としては、公式ガイドブックの出版、瀬戸内国際芸術祭 2016 のホームページ開設、各会場現地でのさまざまな情報発信が挙げられる。

公式ガイドブック『瀬戸内国際芸術祭 2016 公式ガイドブック アートの島旅ガイドー春・夏・秋』は全 307 ページからなっており、特集記事、モデルコース、芸術祭めぐりの心得⁽³⁾、各島作品ガイド、飲食店中心の島情報、地図、交通情報（船の航路と時刻表、島内バスの路線図と時刻表、レンタカー、タクシー、レンタサイクルの案内）、ホテルや民宿などの宿泊情報、パートナーシップ事業、連携事業、他の地域のさまざまなアートイベントが掲載されている。この公式ガイドブックはタイトルに「旅ガイド」とつけられており、また飲食店、交通情報、宿泊情報が掲載されていることから、単なる芸術祭の作品ガイドではなく観光ガイドとして利用されることが想定されていることが明らかである（北川、瀬戸内国際芸術祭実行委員会監修、2016）。

瀬戸内国際芸術祭 2016 のホームページには概要、作品・作家、イベント、チケット・グッズ、アクセス、応援（寄付、ボランティア募集など）、ニュース、ブログ（総合ディレクター北川フラムのブログ）が載せられており、随時更新されている。

また各会場現地でもさまざまな情報発信が行われている。インフォメーションセンターは宇野港、高松港と各島の港にあり、インフォメーションセンターには案内スタッフがおり、チラシ、パンフレット、公式グッズ、土産品等が置かれている。パンフレットは芸術祭全体の共通のものだけでなく、各会場ごとのものもある。宇野港のインフォメーションセンターではレンタサイクルの貸し出し手続きも行われているが、このレンタサイクル自体もアート作品となっている⁽⁴⁾。各作品やイベント会場、施設を案内する案内板も各所に設置されている。ただし、案内板自体それほど多く設置されているわけではなく、また表示の仕方も比較的簡単なものである（写真 1）⁽⁵⁾。



写真1 瀬戸内国際芸術祭展示作品の案内看板
(著者撮影)

(4) 芸術祭とまちづくりの関わり

観光まちづくりとは、前述したように単に自治体の観光振興政策や観光開発にとどまらない地域づくりのことであり、そこには外部観光事業者のみが携わるのではなく、自治体、地域住民による取り組みといった特徴がある。この芸術祭にはベネッセという企業の大きな関わりも存在するが、会場となっている地域の住民がどのように芸術祭に関わっているか、いくつかの例をあげる。

住民参加のしかたとしては、ボランティアガイド等の観光客への案内、イベント開催と参加、作品制作への関わりがある。住民の作品制作への関わりでは、小豆島土庄港に置かれている「太陽の贈り物」はオリーブの葉を王冠に仕立てた彫刻であり、オリーブの葉には地元の小学生のメッセージが刻まれている。他にも住民が制作を手伝った作品はいくつもある。イベントもさまざま開催されているが、同じく小豆島土庄地区「迷路のまち」で行われる「3万4000人のキャンドルイベント」は、キャンドル制作とイベント開催に地域住民が関わっている（写真2）。

また豊島の「島キッチン」は住民と丸の内のレストランが協同開発した、地元食材を使ったメニューを提供するレストランである。このレストランでは通常の食事の提供の他に、テラスでイベントの開催等が行われる（写真3）。

地域住民が瀬戸内国際芸術祭に対してどのような関わりを持ち、そのことに対してどのよう



写真2 3万4000人のキャンドル
イベント（著者撮影）



写真3 島キッチン建物（著者撮影）

に評価しているのか。原直行の豊島での調査によれば（原，2012），地域住民は土地，家屋，資材の貸与，提供や島キッチンなどでの仕事を通して関わっているものが多く，また観光客，作家，サポーターのこえび隊のメンバーとの交流も行っている。結果として，芸術祭開催後には景観が整備されたこと，多くの人と交流が持てたことなどによって満足を得て，地域が活性化されたという実感を持っていると言える。

また観光まちづくりが成功するには，複数の観光資源を有していることが重要な要因となってくるが，前述したように会場の各島には元々別の観光資源を持っている地域も少なくない。そうした別の観光資源とアート作品を組み合わせるまちづくりを行っている地域としては，小豆島の馬木地区が例としてあげられる。この地区は古くから続く地場産業の醤油工場や蔵など明治期の産業建築物群の立ち並ぶ地区であり，こうした歴史的景観を「醬の郷景観整備モデル事業」として整備している。この景観整備事業は，地域ブランド化や観光振興をとおしたまちづくりとして行われているものであり，観光まちづくりのひとつと言える。この地区のアート作品の一部はこの醬の郷の町並みを歩いた先に展示され，歴史的景観と現代アートを同時に体験する観光ができるようになっているのである。

5. 終わりに

本稿では、瀬戸内国際芸術祭を例にして、アートとアートイベントによる観光まちづくりがどのように行われているかを見てきた。アートやアートイベントによる観光まちづくりは、特定のテーマに沿った「テーマ化された観光まちづくり」である。通常、テーマ化されたまちづくりは、その地域となんらかの関わりのある、言い換えればその地域らしさを表す歴史、文化、産業といったものをテーマとして行われる。しかし、瀬戸内国際芸術祭の会場各島は、もともと現代美術と関わりをもっていたわけではない。ここには直島がアートの島として徐々に認知されていくなかで、この地域と現代美術のつながりが見出され、瀬戸内国際芸術祭というアートイベントが開催され、現代美術がこの地域の観光まちづくりのテーマとなっていくという経緯がある。

テーマ化されたまちづくりは、その地域に関係のあるテーマであったとしても、地域住民の合意や協力なしには成立しえないものである（安村，2006, p. 136）。瀬戸内国際芸術祭会場となっている地域がアートをテーマとした観光まちづくりに取り組み、成功をおさめているとすれば、それはアートイベントを開催し、地域住民がイベントに関わりを持つことで、アートの島々という新しい地域らしさが創出されつつあるからであるといえるのではないだろうか。

注

- (1) 北川フラムは、新潟県高田市出身であることから大地の芸術祭の総合ディレクターとして指名されたということである。北川は大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭の他にも、いくつかの芸術祭をプロデュースしている。
- (2) 大地の芸術祭では「こへび隊」という名称のサポーターがあり、その名称に対応してこへび隊が結成されたと思われる。こへび隊もこえび隊も地域、年齢、性別等に関わらず多くのメンバーが参加している。
- (3) 島を歩きやすい服装のアドバイスや飲み物の持参、ゴミを持ち帰るといったマナーに関する注意などがなされている。
- (4) このレンタサイクル自体も、放置自転車を再生させた小沢敦志による「終点の先へ」という作品である。
- (5) 本稿における写真はすべて、2016年瀬戸内国際芸術祭会期中に著者が撮影したものである。

参考文献

- 秋元雄史, 安藤忠雄ほか, 2006, 『直島 瀬戸内アートの楽園』, 新潮社.
- Holt, Sven, 2010, 「祭りからイベント観光へ」, 『福岡女子大学文学部紀要「文藝と思想」』, 第 74 号, pp. 61-84.
- 株式会社日本政策投資銀行大分事務所, 2010, 『現代アートと地域活性化—クリエイティブシティ別府の可能性—』.
- 株式会社野村総合研究所, 2015, 『社会課題の解決に貢献する 文化芸術活動の事例に関する調査研究報告書』.
- 北川フラム, 瀬戸内国際芸術祭実行委員会監修, 2016, 『瀬戸内国際芸術祭 2016 公式ガイドブック アートの島旅ガイド—春・夏・秋』, 現代企画室.
- 暮沢剛巳, 2007, 『美術館の政治学』 青弓社.
- 原直行, 2012, 「アートによる地域活性化の意義—豊島における瀬戸内国際芸術祭を事例として—」, 『香川大学経済論叢』, 第 85 巻第 1・2 号, pp. 71-100.
- 袁豊, 2007, 『超・美術館革命—金沢 21 世紀美術館の挑戦—』, 角川書店.
- 長畑実, 枝廣可奈子, 2010, 「現代アートを活用した地域の再生・創造に関する研究—直島アートプロジェクトを事例として—」, 『大学教育』, 第 7 号, pp. 131-143.
- 中島正博, 2012, 「過疎高齢化地域における瀬戸内国際芸術祭と地域づくり—アートプロジェクトによる地域活性化と人びとの生活の質—」, 『広島国際研究』, 18, pp. 71-89.
- 中島正博, 2014, 「過疎高齢化する離島のまちづくりと芸術祭—瀬戸内・男木島の再生へ向けた住民の活動—」, 『広島国際研究』, 20, pp. 93-104.
- 大成浩市, 2003, 「新しい過疎の風景—富山県利賀村に見る地域おこしのダイナミズムとネットワーク—」, 古川彰, 松田素二編 『観光と環境の社会学』, 新曜社, pp. 79-101.
- 瀬戸内国際芸術祭実行委員会, 2015, 『瀬戸内国際芸術祭 2016 実施計画』.
- 高見澤なごみ, 古田賢, 枝木妙子, 永井彩子, 後山剛毅, 2016, 「ベネッセアートサイト直島における『直島らしさ』をめぐる」, 『コア・エシックス』, 12 号 26, pp. 331-341.
- 高山啓子, 2014, 「テーマ化される観光とまちづくり」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 25 巻第 1 号, pp. 55-65.
- 安村克己, 2006, 『観光まちづくりの力学—観光と地域の社会学的研究—』, 学文社.
- 瀬戸内国際芸術祭 2016 <http://setouchi-artfest.jp>
- ベネッセグループ <http://www.benesse.co.jp>
- 醬の郷 <http://kelly.olive.or.jp>